

なにがデザイン(では)ない(のか)

— how we can describe: to design and design not

関 口 久 雄

第2章 データは燃えず、ただ消え去るのみ、そこに余白はあるのか

chapter 2: it wouldn't be make-believe if you believed in the future and the past

紙は、メディア、デジタルということばが流通することによってアナログと呼ばれるようになった存在。ただし、当然のごとく、アナログはアナクロではない、時代遅れ、という意味は持たない。亀甲、獣骨、石材、粘土板、竹／木簡、貝葉、絹布、パピルス、羊皮等々を経て、後のルネサンスの原動力となる火薬、羅針盤とともにオリソピックの開会式でLEDによる巨大な巻物として誇示されたように、中国で麻くず・樹皮等の繊維を原料に紙漉きの方法が洗練されることによって実用に値するものがつくられ普及しはじめたのが約1900年前。当時は最先端、現在でも重要な知の記録媒体であることになんの変わりもない。以下に綴ることを試み

るのは、それを情報伝達手段として用いる際には欠くことのできない大事な要素、印刷・文字・インク／インキ等々の詳細な歴史や社会的文化的役割の分析ではない、最低限の常識／俗説を前提に、このメディアを巡る今を、軽薄に、素朴に、考えてみることである。

紙は、変わった、変わろうとしている。その変容に伴う社会生活のさまざまな変化で混乱も起きている。振り返れば、シルクロードを通じて伝搬した紙。ただし、交易の最貴重品の製法を中国は明かさなかった、重要なソースコードの伝来は、かなり後、日本へは7世紀頃、ヨーロッパへは12世紀頃。声というメディアには時間と空間の制約がある、文字によってメッセージは時空を超えるようになった。紀元前約3500年頃の石や粘土に楔を打ち込み、象形、聖刻、人類は記号を伝達手段として活用できるようになった。紙を相棒に、墨と筆による書写、拓本や印章から連なる木版、情報の記録／複製のテクノロジは、活版印刷によって世界を一変させることになる。15世紀の半ばに、圧力をかける「press」という過程をブドウ絞り機をヒントに制作したという活版印刷機によって、四十二行の聖書が出版された。活字の組み合わせによって情報の大量複製が可能になった、社会のごく一部の階層に秘匿されていた知の解放がはじまった、それは大量伝達「マスメディア」のはじめりでもあった。けれども、言うまでもなく、メディアの進化の道は1つではない。そのようないわゆる鉛合金の活字、その土台となる黄銅の母型、印刷という作業に適したニス状の油性インク／インキ等々を使用した機械作業への移行だけが正解ではない。たとえば、当初中国は活版印刷が普及しなかった、それは文字の数が26文字ではなく、数千もの活字を揃えておくことが困難だったからといわれる。日本も同様に文字

の数が多く、しかも縦書きの崩し字等が用いられたため自由度が高い木版の方が効率的であると活版印刷は選
択されなかった、本は大量生産されず高価なままであった。でも、それは退化を意味しなかった、その結果、
江戸時代に浮世絵等の木版技術や庶民のための貸本という出版文化が発展したのであるから。印刷の技術も、
凸版からはじまり、用途に応じて凹版、孔版、ついには版と紙が直接触れない平版／オフセットへ、そして色
の濃淡を再現する網点等々によって表現の幅はどんどん広がっていった、さらに企画・組版・校正・製版＝プ
リプレス工程すべてがコンピュータのデスクトップ上で作業可能になった別次元のDTPへ、と進化を続ける
(同時に、名刺・はがき程度ならともかく本を1冊活版で印刷することは、日本ではすでにほぼ不可能になっ
てしまったのも見逃せない現実である)。報道＝the pressは紙からはじまった、そこには諸々の大きな力が必
要だったのかもしれない、だが、印刷を示す単語がいつの間にかpressからprintに変わっていったのと呼応
するかのようになり、そして、DTPのpはpublishであるようにだれもが容易に発信者になれる時代が訪れてい
た、そこではもう紙は要用ではないのかもしれないが。

紙は、モノでもある。JISによれば、植物繊維その他の繊維を膠着させて製造したもの、と定義される。いわ
ゆる和紙、洋紙からトレットペーパー、ティッシュペーパー、段ボールまで多種多様な紙が製造され使用さ
れている。大きさの基準もある。比率1： $\sqrt{2}$ の841×1189mmと1030×1456mmをそれぞれ半分に次々に分
割していくと日々の事務作業の道具、788×1091mmを32に裁断すれば日本の書店に並ぶ一般的な紙の束にな
る。もちろん重さも厚さもある。1平方メートルあたりの紙1枚の重さ＝坪量、紙1000枚の重さ＝連量の

単位で取引され、ごく薄い取るに足らない存在だと思われがちだが、新聞紙1枚を42回折ることができたら、月までの距離になってしまう(折ることは不可能であるが)。そして、モノなら触れられる、たとえば、この点線に沿って折ることが可能である。……

切ることもできる、点線に従わずくしゃくしゃにもできる、ぐちゃぐちゃに破ることもできる(もし試みに破いてみたいのならば、他の執筆者に迷惑がかかるので、このページだけにしていたきたい)。そのような特質を持つ紙が、物質性を伴わない電子に装いを替えようとしている(この文章も、いずれはwebで公開されるであろうが、そのPDFファイルを、くしゃくしゃにも、ぐちゃぐちゃにもすることはできない)。油性、水性、ジェル等の種類がある顔料・染料を含有するインク／インキという液体は、それを使用する代名詞であった万年筆からインクジェットプリンターへと日常的な関わり方は変化し、ついには透明なマイクロカプセルの中の白色と黒色の顔料粒子に電圧を掛けて移動させ表示をおこなう媒体となった。その新しいインク／インキを用いる電子ペーパーと呼ばれるニューカムーは表示内容を電気的に変えることができる、消しゴムや修正液等を使わずに、瞬時に書きかえ可能な紙が誕生したのである。

紙は、文字と出会い、歴史／物語は綴られるようになった、エクリチュールは快樂となった。しかも、その産物であるテキスト／テキストは紙と別離して迷子になることができる(そして、享樂にふけることになる)。たとえば、6年前に、どこかで、筆者自らが書いた文章を、今、ここに、そのまま、引用が可能である(6年前の肉声を、ここに再現することは容易ではない)。

人類にとって、大きな力を持ち得てきた(といわれる)「読書(本を読む)」という社会的／文化的営みが、何度目かの転機を迎えようとしている(らしい)。たとえば、近年、かたい本が売れなくなってきた、とのことだが、その主な原因は、TVやVIDEO(DVD)そしてコンピュータ(インターネット)等の新しい「メディア」が広く普及し、読書時間が減ったから、といわれる(マジ?)。そして、そのような読書離れは概してネガティブに語られがちである。しかし、一方で、情報のチャンネルが増加し、単なる「文字」だけではなく「音声」や「映像」を幅広く扱えることをポジティブにとらえる声も増えている。また、そのような賛否に加え、「これまで近代社会を支えてきた本というメディアの代わりに何が文化的公共圏を支えるのか?」といった議論が展開され、同時に「アナログ」から「デジタル」への技術的進化(転換)に伴い、「紙」と「活字」によって構成される「本」に加え、「ディスプレイ」で読むという「10」の「データ」の集積である「本」が登場し、ネット上の「掲示板」「ブログ」等とともに、新たな「文字文化」として力を持ちはじめている。そもそも私たちは、なぜ／どのように本を読んでいるのだろうか。そして、今後私たちの本を読むという行為のなにがどのように変容する(かもしれない)のだろうか…一読者／一利用者／一消費者／一著者として、永遠の過渡期である本を巡る混沌とした状況を、無責任に楽しんでいる今日この頃である。

ただし、そのまま、と書いたが、厳密にいえば、そのままではない。いわゆるオリジナルの記述は、まず紙に印刷され全国の図書館等に配布され、その後、ネット上でPDFファイルとして公開されているが、それは横書きで、引用の文章とは、フォント、行数、文字間、改行位置等々、まったく異なる。文字には、表音、表意

が、そして、日本語の表記では、縦書きと横書き、漢字、ひらがな、カタカナ、英数字、ルビを混在させて意思伝達をしている。私たちは、それら进行操作してコミュニケーションを成立させている。けれども、コンピュータのフォントは2種類も必要ない、と考える人もいれば、大学を中退後に、わざわざ calligraphy の授業を盗講して、それを後の DTP の進歩に活かす人もいる。無意識的に／意識的に、私たちは文字と接している。いわゆる一般的な社会生活を営むほとんどの人たちは前者であろう、その人たちは、そのようなオリジナルと引用に差異を感じない。他方、少数であろう後者の人たちは、それらをまったく別物と考えてしまう。この文章自体も縦書きで印刷され読まれることを想定して、iPhone 3GS の Write Room と Mac Book の Simple Text、MS をエディタとして書いている、といっても、フリックで、キーボードで、入力している、横書きで。そして、資料のための書籍や雑誌等を除き、校正のためにプリントアウトするまで紙とは無縁の執筆をおこなっている。

紙は、読みやすい、持ちやすい。しかし、書きやすい、という物言いが聞かれなくなって久しい。今、世の中に、書く、は、あふれている、いわゆる非プロの文章＝悦楽をこれだけ目にすることはこれまでなかったはずでも、それは、いわゆる手で書いたものではない。いわゆる文筆を生業とする人たちにおいても、すでに生原稿という単語も死語になりつつある、一部の例外を除いて、かつてのいわゆる文豪の記念館等での展示品がほとんど最後のものになるのかもしれない。すでに主流となってしまった、コンピュータで書くことによって、その文章は、紙とインク／インキのような質料性を持たなくなる、脱物質的な性質を持つ電子的なデータとな

る。私たちがコンピュータのディスプレイ上で見ているのは依然として文字ではあるが、テキスト／テキストは電子テキスト／テキストに生まれ変わってしまった(同時に、キーボード等の入力に依存する者は、たとえば、筆者は、漢字のど忘れだけでなく、1000字程度の文章もなにかしらの装置がないと文章がまとまらない、その程度の筆記でも腕が筋肉痛になってしまう)。新たに登場した書きかえ可能な紙は、従来のいわゆる紙を指して、より読みやすく、より持ちやすく、そして、電化製品がどうしても避けられない消費電力を低下させることへと進化を続ける。ただし、内容はともかく、薄い／軽い、という形容詞は、もうその紙には伴わない、それは、そのデバイスのものとなる。新たな紙は、自分の好きなフォントで、自分の好きな大きさで、文章を読むことが可能となる。たとえば、この文章もなにかしらの合理的な理由によって選択されたであろう明朝体49字×17行という枠の中に組まれて出版される。そのような、いわゆるプロによる伝統芸的なグリッドから解放される、そのデバイス等の環境に依存しながらも、個々人の好む新たなグリッドを選択できるようになる。もともとと本と無縁な若者たちよりも、本は読みたいが近くのものにうまく焦点を合わせることができなくなった高齢者たちにとつての、便利な道具になるかもしれない。だが、その可変性は、新たな問題も引き起こす。ディスプレイの大きさが変わらず、文字の大きさを変化させれば、おのずと1ページの文字数も変化する、総文字数は変わらない、よって全体のページ数が増える。するとなにが起きるのか、これまでのような引用等の位置の指定が意味がなくなってしまう。けれども、それは黎明期ゆえの混乱の1つ、いずれルールは統一されるであろう、引用等のタグは、何頁の何行目から、何文字目／総文字数になるのかもしれない。文字がデータになれば、すべての文字が検索の対象になる。キーワードを入力し、そこにそのまま飛んでいく。

これまでの表1からはじまり表4で終わる、というシーケンシャルな読み方も、選択肢の1つでしかなくなる。閉じられた世界の中でのハイパーテキスト／テキストとの新たな関係性の構築（原理的には開かれた世界とのリンクも可能）。それは文字、文章、あるいは画像や図版等を情報して活用するということ、readerはuserとなる、新たな本との対峙がはじまる。定着／不動を絶対とする、実は堅固で、融通のきかない、紙と離別し、いわゆる読者と呼ばれ、いわゆる主体とはみなされてこなかった人たちが、これまでの抽象的な試みとは異なり、限られたものとはいえ、より具体的に、主体的な選択をすることができるようになった、そして、唯一の主体と考えられてきた、いわゆる作者が、すでにさまざまなカタチで語られてきた死の絶望／欲望を止揚するだけではなく、その新しい条件を前提に、思い／考えを作文することによって、はじめてテキスト／テキストが透明なメディアにな（れ）るのかもしれない（そこには振るべき骰子があるのであろうか）。ただし、この一連の変容は、テキスト／テキストのもうひとつの不可能性／可能性も露にしまった。完結していると偽らされ続けてきた未完にならざるをえないテキスト／テキストが、時代の要請なのか、神様の戯れなのか、清書というプロセスを排除し、映像制作と同様に、永遠のベータ版のままではいられるデジタルな媒体をパートナーとしてプレゼンしてもらったのである（いわゆるeBookならば、その途上のまま公開／共有も可能）。それは、新たな、解放なのか、逃走なのか、現実社会を司る強固なディスクールからの。

紙は、日々消費されている。1987年に全国放送され、VHSに3倍速で録画してあった、あるノンフィクションのテレビ番組を、データ化してiPadで見してみる。本が読まれない、でも、本がどんどん出版されてい

る出版の現状を某脚本家がリポートしている。最盛期に653万部を発行しギネスブックにも登録された遊楽社の週刊少年ジャックとしてNHKのアニメにも登場する雑誌の流通が報告される。漫画家が作品を書き上げ、4日間終日6カ所の印刷所で毎週410万部を印刷され、東京では月曜日発売、でも船輸送等しなければならぬ石垣島の書店に届くのが4日遅れ、本屋さんのない西表島には7日遅れ、しかも輸送料がプラスされ50円高い。そして、ベストセラーを中心に都会の大書店は本が溢れ、地方の本屋さんには本を注文してもなかなか届かない。大多数の人のための商売だけでなく、少数の人のための少数数の出版ができないのであろうか……とまとめられる。20年後の今も状況はそんなに変わらないであろう。本が読まれない、という状況はさらに進行しているのかもしれない。しかし、全国への配本の問題等は電子化で解決しえるであろう、少数のための作品でも全世界同時に配信することが可能である。そもそも楮や三桮や雁皮等を原料とし傘や提灯や扇子の材料にもなる和紙は少量生産／消費される、一方、大量消費を目的とする洋紙の原料は自然破壊の元凶という視点から針葉樹や落葉樹を原料とする木材パルプから非木材植物や古紙の利用へ、と試行錯誤がくり返されている。かつてコンピュータが普及すれば、ディスプレイですべてを確認できるから印刷しないで済む、紙の消費量は減少する、究極的にはペーパーレス社会が訪れると囁かれた。だが、現実には、透過光での文字読みは眼にはやさしくなく結局はプリントアウトして校正することに、それとともに、むしろ気軽に自分の文章や資料等をどんどんプリントアウトしてしまい、それらが会議等で配布するために大量にコピーされている。あるいは、押し紙・アジャスタブル目標・残紙等々、都市伝説として隠蔽される数字も含まれているであろう公称部数は、いまだにビッグ3と呼ばれる3社だけでも、おおよそ10000+7900+360万部、そのような55

×406.5mmで約32頁が、印刷され、輸送され、毎朝家庭に届く、それらの紙はおそらくその日のうちにゴミになる、少なくとも新しい情報ではなくなる。そして、いわゆるベストセラーと持て囃される本の多くは、いわゆる実用書、必要とされるのは、多くの場合は最新の情報のみ、それらは手沢にはならないであろう。読み捨てられることが前提の諸々の情報媒体が紙である必要があるのか、逆に、全文検索等いろいろな活用できた方が有用なのではないか。

紙は、フエティンズム物神崇拜もつきまとう。切手、カード、チラシ等のコレクターだけでなく、いわゆる読書好きではなく、本好き、愛書家と呼ばれる人たちは、読むことを求めているのか、収集／所有すること求めているのか、書豚／書狼／書痴となり、稀覯本を、世界に1冊の本を、独占したくなる、その執着は病みである。そのような人たちに出会うと、適当に文字や写真を並べプリントアウトした紙束を単に綴じれば本／雑誌になる、と安易に考える見識のない人たちがマトモに思えてくる。そこまでいかになくとも、本／雑誌にさまざまな書き込みをする人がいる一方で、いわゆるアンダーラインや折り曲げるのも嫌な人たちもいる。本／雑誌との関わり方は十人十色、たとえば、多感な時期を今泉棚の立ち読みで我慢していた貧乏学生たちは、老眼と格闘しながら松丸本舗で喜々として大人買いをしている。大宅文庫や六月社のコピーでは満足できず、ブックオフやヤフオクで珍奇な雑誌を狩猟することに生活の大半を費やしている人も少なくない。オリジナルのかわいい豆本を自ら手作りする女子たちも話題になっている。僥倖的な本／雑誌との出会い、その後の人生に与えた影響等々は、いろいろなカタチで甘美に語られる。本を読む、という行為も神聖視されてしまう(本も読みすぎれば眼が悪

くなる、本を買えばお金はなくなる等の当たり前なことは無視される)。読書は習慣。習慣は無意識の記憶の反復、継続を受けられるのならば、新たな学習等を必要としなくて済む、身体を用いるのであればなおさらである、手癖のなすがまは心地よい。それらの行為、付随する道具等を当然／常識／絶対と考えがちである、そして、それらのふるまいは既得権にもなりうる。新しい本は、そのような人たちには好まれない。特に、多くの人たちから批判されるのが、ページの物理性がなくなると、どこを読んでいるのかわからない、葉や指を挟んだ時のだいたいの残りのページ数がわからないのは、読書体験ではない、分厚い本を一頁一頁捲りながら読み切った後の充実感こそが大事なんだ、と。それに対して、そもそも直接体験は絶対的に必要なものなのであるうか、という疑問が出てきてもなんら不思議ではない。訪れる人たちの発する湿気やCO₂で人類の偉大な歴史物の損傷を防ぐために閉鎖される世界中の遺跡や洞窟、それらをどうにかして、よりリアルに再現しようとする議論、かつてはそれが映像記録であった、今ではweb上で仮想空間を歩き回れる。人類の英知の歴史が刻まれている紙も、直接触れることは防犯／保存のためにも許されない。よって、新たなテクノロジーの進化は進む。スローン卿の収集からはじまったとされる世界最大のmuseumに所蔵されている、世界に48部しか残存していない聖書や英国憲法の土台となった文書や天文学の父の書簡やアマデウスの手書きの楽譜が、すでにiPhone/iPadのアプリで、簡単に閲覧できる、手でズームできる。触る、は、touchに、感觸の、感、センサーを媒介としたデジタルなフィードバックとして共有されようとしている。だが、いわゆるフェチな人たちは決して認めはしないであろう、このような不埒なことを語る者は、本を断裁することを前提とする電子書籍の自炊を奨励している人たちとともに、彼ら／彼女らのデスクトップに名前を書かれてしまうかもしれない

紙は、記号でもある。その代表的なものは、紙幣。文字等の情報を印刷した紙を束ねた本というモノにも、さまざまなイメージがつきまとう。本の集合体＝蔵書は、本を読む＝賢そうに見える等々をさらに強調する。それが壁一面になれば、孤独な老教授の閉ざされた内的世界の表象にもなりうる。いわゆる見栄のための道具にもなっている、住宅や店舗の室内装飾用としてペーパーバックから大型百科事典まで各種洋書が販売されたりもしている。新しい本は、どのような記号として社会と折り合いをつけていくのであろうか。この文章の中では、文字・テキスト／テキスト・本・書籍・雑誌等々、いわゆる定義づけせず、あえて混同して使っているが、分類はその存在の社会での位置づけであることは言うまでもない。ただし、新しいものは、まだそのカテゴリーが存在していない、がほとんどである。有名な逸話として、馬車＝carriage が移動手段の時代に、いわゆる車＝car が登場した。当時の人たちは、それは馬なし馬車＝horseless carriage と相手にしなかった、時代を経て、車は車として認められるようになった、馬車との地位を逆転しながら。無線＝wireless 是有線ではない、動画＝moving pictures 動く画、もすでにポジションを確保している、最近では、電子メールから電子は除かれ単にメールと呼ばれるようになっていく。新しいなにかが登場する時、それをどのようにカテゴリー化するのか、で社会は混乱する、そして、その未知なるものを、それが正しいかどうかはともかく従来のなにかに喩え、その新しい用途等を社会に定着させていく。既存のものを整理／再統合する場合もある、電子の本／書籍／雑誌／新聞が登場することによって、これまでのものが、紙の本／書籍／雑誌／新聞と呼ばれるようになる。

った、昔の人からみれば、馬から落馬したのような誤用に思えるかもしれないが。将来的に、本／書籍／雑誌／新聞として、一般的な名詞として使用されるのは、どちらなのであるうか。一方、本を読まない、読むことができない、も象徴として機能する。なぜ？という疑問をもたずに生きる社会をテーマにディスプレイア未来はいくつも描かれてきた。たとえば、その世界では、思考の単純化と思想犯罪の予防を目的として語彙の量が減らされ、歴史を参照させないために、過去の文学作品も政府によって都合よく書きかえられる。各家庭に常備された大型スクリーンは、感覚を麻痺させる娯楽情報を24時間供給および国民全員を監視する装置、ここに救世主＝Macintoshは登場しない……ここまででは納得はできる、そのような社会が訪れないようにしなければならぬ、と強く同意できる。が、反社会的という理由で読書は禁止、本は焼き捨てられるストーリーの結末は、すべての本が撰氏233度で焼かれたとしても、それを後世に残せるようにと、1人1人が本を暗記すればよい……。そこで重んじられているのは本というモノではなく、本のなかに封じ込められた知識＝思想＝情報ではない。それは本でなくても他の情報媒体でも代用できるのではないか。検閲の合法化と言論弾圧に唯一対抗できる存在＝図書館が主役のフィクションもある。だが、現実的には、予算削減等で、専門正職員も雇わず、本を大切に、と来館者に警告しながら、管理のためとはいえカバー等を廃棄し、本を選択する、という政治性に無頓着な多くの日本の図書館にユートピアは見出せない。映像や音声＝感覚的、文字＝論理的、音も映像もない＝想像力を喚起する等についての議論はここでは割愛するが、テレビやネットがない時代の人たちが愚かな戦争をいくつも起こしてきたなどというつもりは毛頭ない、しかしながら、本からは知識を得られるが、本に書いてあることをそのまま鵜呑みしている人たちも少なくない、いわゆる本しか読まない人たち＝活字の

世界に安住する人たちにとって、その他の情報源からの情報、否、社会自体が非存在であることも否めない。他方、本を読まない人たちは、今後、本がどんなカタチになったとしても、読まないであろう。ただし、言うまでもなく、本を読まないことは、決して罪でもなんでもない、その人の選択である(育った環境等の事情があるとしても)。そして、いわゆる検閲自体も見越(こ)してはならない大きな問題であるが、日常的な光景、わかりやすく書き直して欲しい、という善意も検閲の1つである、それは、その文章を読むであろう人たちの能力を過小評価し、ありえたかも知れないコミュニケーションを不成立させようとしているのだから。知識の体系化の欲望もとどまることをしらない、ボルヘスの妄想はいつの日か実現するのかもしれない、Dyrabookの創造主がことあるごとに vivarium と例示するように、デジタルの住人たちには、いわゆる悪意はないのかもしれない。けれども(1)のシニフィエはどうしてもネガティブなものになってしまうのか、無邪気さに潜む暗黒管理社会の懸念は残る、一私企業の安定した垂直統合ではなく、たとえ不安定でも公的なまとめ役が求められる。その主体は一国家なのか、連合的なものであるのか、そこではネット社会の正邪含めた多様性は維持できるのであろうか。脱部族化／再部族化した人たちのための新たな公共性が求められているのかもしれない。

紙は、ほとんど話題にはならなかった、2010年は電子書籍元年と大きく騒がれたが。ただし、電子の諸々は、決して新しいものではない、すでにそれなりの歴史と失敗の経験を蓄積している。この年は単にネットのインフラが整い、念願のいわゆる課金システムが確立し、持ち運べるデバイスが登場しただけ、といっても過

言ではないかもしれない(話題となつてゐる touch という操作方法は、タブレットの方が開発は先と報じられてゐるが、再定義された携帯電話が3年前に販売され普及することによつて浸透させたもの)。それらの状況に既存のビジネスで立ち行かなくなつた人たちが新たに狂乱しているようにしか思えない、デファクトを勝ち取るために。新しいなにかが登場することによつて、その世界が一変することはない、古いものと新しいものが並立・共存するという複合／混沌な状態になる、そして、徐々に、その役割の転換が起こる。しかし、たとえば、電信や電話の登場によつて郵便がなくなつたように、テレビの登場によつてラジオがなくなつた。それとともに、メディアにはメディアそれぞれの役割と特性がある。たとえば、ケータイ小説は未成熟なメディアであることは否めないが、ケータイというメディアによつて表現をしている、ケータイというメディアを選択した小説である、紙で読んで評価する作品ではない。いわゆる作品やジャンルの優劣を問題にしてゐるのではない、どの形式を選択するかに正否や正誤があるわけでもない。どのような形式を選ぶかで、その時点で内容が規定される、形式はその内容の一部であるとともに全部であるということである。一方、新しいものは、ダメだ／わからない、と公然と批判／無視する人たちがいる、でも、その人たちは、古いものは知つてゐるのであろうか、自分が生まれる以前の古いものも。経験談は説得力がある、ただし、人間の寿命などたかが知れてゐる、人類の過去を省みない者には、未来を語ることもできない。さらに、古い、新しいかわからず、可能な限り、自ら、その道具／メディアを使用しない者は、それらを語ることは許されなければ(使用したとしても訳のわからない持論等を押しつける方々は問題外であるが、未使用よりもマシである)。いずれに

しても、混乱は恒常的なもの、はじまりも終わりもない物語。けれども、いわゆる本をメディアとして真摯に対峙している者たちにとっては当然の前提がまったく共有されていないのも明らかである。たとえば、紙を束ねた冊子の書物と電子の書物の連続性を自明とするかどうか、本は単なる情報の器か否か、で、議論はまったく異なる方向へ進む。あるいはこの流れを新しきモノ／者たちによる文化の破壊とみなすのかわりで、一歩も進まないかもしれない。それはOSの変更のような大きな作業かもしれない、場合によっては、右利きの人に明日から左手に箸を持って食事をして下さい、と強いているのかもしれない。だからといって、立ち止まってははいられない、少なくとも変化への対応の準備はしておくべきであろう、幕末のもののおふを気取るかのごとく減びの美学に自己陶醉しない限りは。なぜなら、後漢代の宦官が、重くて高価な媒体は不便である、と紙を有用なものに改良していったように、各時代各地域等々での合理的な選択の流れは止めることはできないであろうから。その流れに従えば、より合理的な情報伝達手段が存在するのであれば、それが選択されることは拒めないはずである。そして、いわゆる既存の本というモノは、決してなくならないであろう、しかし、それは一般的な消費物ではなく、贅沢品あるいは工芸品のようなものになるのかもしれない。その時代には、装幀／装丁／装釘家は重要無形文化財の保持者として尊敬されているのであるとか、一方、ブック・デザイナー、本のソムリエ、あるいは編集工学者たちは、新しい領域を切り開いているのか、それとも古き良き時代を懐古しているのか。いまだ揺れ動いている音楽業界以上の混乱も予想される。CDという移行期間もなく、レコードからそのままデータへ、いわゆるパッケージは単なるアイコンになってしまいかもしれない、ジャケ買い／表紙買いもなくなってしまうのか。産業構造も変わるであろう、絶版／返本／在庫管理はなくなるかもしれない

いが、再販と委託という制度に保護されなくなる世知辛いが真つ当なビジネスがはじまるのかもしれない。流通も変化するであろう、毎日見かける新聞配達やキオスクへの大量の雑誌等の運搬も懐かしい光景になるのかもしれない。権利の諸問題は時間がかかるであろう。ページの可変等に伴う、新聞のレイアウトに代表されるような版面の維持⇨フォーマット⇨ページネーション⇨編集著作権は、再考されるであろう、そのインターフェイスとともに。必要であれば、電気自動車にガソリン自動車の走行音の擬音を付加したような、なにかしらの擬似的な既存の模倣は可能であろう(たとえば、紙のページの匂い等々も)、だが、ページをめくるというメタファも不要となる、これまでとは異なるアフォードランスが当然になっている時代がいつかはやってくるのかもしれない。図書館での全体の半分を超えないコピーしか許されないとした因習もどうなるのか、複製という概念／行為も改めて議論されるのであろうか。これまでの本は、いわゆる相続可能であった、データとなつた書物は財産となりえるのか、いわゆる古書市場はどうするのであろうか、既存のものだけを骨董品のように交換／売買するだけになるのか。法律的には厄介なことであらうが、クラウドにある蔵書のDとパスワードを移譲する時代が来るのであろうか。ところで、だれもが気軽に参加できるネット社会ではさまざまな問題が起きる、いわゆる知的訓練を受けない者には情報発信をさせるな、という声も日増しに強くなる、一方で、新しい本での出版活動は、すべて1人でまかなえる、編集者不要論も囁かれる。けれども、それらの不毛な議論に与する必要はない、必要なのは、その前提となる、各々の状況で必要となる諸々のリテラシーとはなにか、それを備えた者がいるのか、これまでにもいたのか、という検討、所属や肩書きではない、いわゆるプロの再定義かもしれない。今回の騒動の主役となっている2つの存在——iPadとKindleは、比較されることが多い。

ただし、2011年の初旬において、日本語の書籍の環境がまだ不十分な米国製の機器という点は共通しているが、混同されることも多い。前者における読書は幾多ある機能の1つでしかない、後者のモノクロ画面は文字を読みやすいが、触ってもなにも起きない、指紋の跡がつくだけである。雑誌の電子版は非常に便利である、紙版は保管や整理や情報の検索が難しい、電子版は、それらの問題を解消／改善してくれる。しかし、現状の日本の電子版は紙版と異なるものではない。JTB版とされているのに、大人の事情で、紙版に掲載されている広告はカットされ（雑誌は広告もその内容の一部として動的な社会の今を否応なく表象してしまう媒体であるはずなのに）、海外の通信社等が撮影した写真は載らない、いくらかのキャプションが付加されているとはいえ、写真がないとなんの記事かわからなくなる場合も多々ある（ちなみに、某事務所の芸能人の写真は、表紙においてさえ、灰色のシルエツトで隠されてしまっている）。雑誌を仕事等のための資料として使うのなら、それらの権利関係がクリアされない限り、電子版は、購入に値しない不完全なものでしかない（それ以前の問題として、現時点の電子雑誌は、雑誌というメディアを愛していない人たちが、単なるビジネスとはいわないまでも、いわゆるポリシーもなく運営しているとしか思えないのであるが）。現状の曖昧なシステムが維持されないと困ることもある。たとえば、書店やコンビニ等でのケータイのカメラでの雑誌のページの撮影情報の方引きが話題になっているが、そのはるか以前から、毎日どこかで合法的に（？）情報の窃盗＝立ち読みがおこなわれている（筆者自身もすでに約40年ほぼ毎日続けている）、いわゆる一部読みでは意味はない。もし全面的に電子化された場合、それらの雑誌を買うのであろうか、それとも読まなくなるのであろうか。

紙は、やはり厄介なメディア、が、無視することのできないメディア、変わったのか、変わろうとしているのか。媒体の変遷を省みれば、文字の登場は、文字を使うと記憶力が悪くなる、と声の文化の住人たちに辛辣に批判された。印刷技術による情報共有の出現は、知を隠匿していた権威者たちに恐怖をもたらした、そして、今、新たななにか、否、本／書籍／雑誌／新聞、読者／利用者／消費者／著者：すべてが改めて問われている、そのさまざまな意味での存在理由を。新たな紙は、既存の体制を大きく揺るがす、そのやんちゃな暴れっぷりは、まさしくメディア遊びである。それとともに、紙の歴史は知の蓄積の歴史、それは内容だけではなく形式の蓄積でもある。現在の視点からは、いわゆる綴じ本が当然のように思えるが、かつて書物は巻物であった(はだれでも知っている)。横長で横組という今ではあたりまえの日本の絵本の形式も、50年ほど前には縦組で縦組のものしか存在してなかった(はあまり知られていない)。美濃半紙をルーツとする明治政府以来の日本の公文書の標準であったB版が、諸々の理由により国際的なスタンダードA版に移行してから20年しか経っていない(大きな問題は起きてないようである)。今の姿は、常に必然+偶然の一時の仮のカタチ。なにげない日常も揺るぎない永遠のものと思いがちであるが、それもうつろいやすいもの、失った時、それが大切なものだと気がつくのかもしれない、でも、時が過ぎると人は多くのことを忘却してしまう。紙の本は不滅だ、と幸福な記憶を語る人たちは、ジョバンニがやっていったアルバイトの内容をきちんと説明できるのであろうか(ピセットの使用は普通なのか、例外なのか)。未来の可能性は無限、神のみぞ知る。firemanの意味は、将来、火を消す人、ではないのかもしれない(その時には、それは救援ではなく攻撃の口火を切る人を示しているのかもしれない、その球技自体が存在していればの話だが)、日本語に50の音がなくても、実は、なんの不便

もないのかもしれない(濁音を加えた66種類の音から29音なくなっても、より多くの語彙が必要であろう情交の場面の描写には問題はないようである)、気がつきさえしなければ、それらを(日)常(の良)識として生活していくのであろう。あらゆる新しかったメディアと同様に、電子の〇〇も、いつかは新参者でなくなる、魑魅魍魎が跋扈する保守的な出版業界のゲリラではいられなくなる、そのシステムの一部として機能しなければならぬ時が訪れる。ただし、そんなことにはおかまいもなく、生まれた時からデジタルな環境で育まれる子どもたちは、なんの予断も持たずに、素朴に、新しいなにかと戯れるであろう、彼ら／彼女らはメールでレポート等することになんの抵抗もないのかもしれない。人が本を選ぶのではなく本が人を選ぶ、といわれるように、情報も人を選んでいるはずである。これまでとは異なる新たなアウラは、もうそこに存在しているのかもしれない、前の世代の人たちには認識されていないだけで。

注

引用・参考・注釈の方法論が未だ定まらず、確定後、<http://bridge.jp/design-not.html>にて公開予定。